

# 高等学校家庭科初任者が抱える教科指導上の不安感

— 関東3都県の初任者への質問紙調査から —

高橋 菜月\*<sup>1</sup>・池崎 喜美恵\*<sup>2</sup>

家庭科教育学分野

(2018年9月21日受理)

## 1. 研究の背景

### 1. 1 教員が置かれている現状と課題

教員が置かれている現状と課題として、文部科学省<sup>1)</sup>の調査によると、教員の年齢構成の偏りにより、団塊の世代の大量退職に伴い、新規採用教員が大量に採用されていることが明らかになっている。したがって、教員の質を維持するために、初任者育成は急務である。

一方で、文部科学省<sup>2)</sup>の調査において、新規採用教員のうち、公立学校における新規採用教員(平成23年度において採用総数28,388人)で、条件附採用期間中に病気を理由として離職した教員(同年度118人)のうち約9割(同年度103人)が精神疾患によるものであることが示されており、採用間もない教員のメンタルヘルスへの取り組みが課題となっている。

### 1. 2 家庭科教員が置かれている現状と課題

家庭科教員が置かれている現状と課題として、日本学術会議健康・生活科学委員会家政学分会<sup>3)</sup>の「生きる力の更なる充実を目指した家庭科教育への提案」において、高等学校家庭科教員は、学んできた専門領域により指導分野に「得手」「不得手」が生じていることが示された。また、高等学校家庭科教員の配属校は、専門学科設置校や家庭科担当1人配置校等様々である。

このような中、初任者も配属校で、1人の家庭科教員として適応し指導することが求められ、それに伴い多様な不安感を抱えていることが予想される。

### 1. 3 家庭科の指導経験が浅い教員の指導不安や困難などの悩みとその支援に関する先行研究

学校種ごとに家庭科の指導経験が浅い教員の指導不安や困難などの悩みとその支援に関する研究の概要をまとめる。

まず、小学校教員を対象にした研究において、高木<sup>4)</sup>は、教職経験が短い期間の教師は、授業中の教科指導に関する不安傾向が大きいことを明らかにした。また、山下・河村<sup>5)</sup>は、家庭科を専門としない小学校の担任教員が、家庭科をはじめて教える際、「家庭科の指導全般」の困難を「①自分自身の家庭科の知識不足による困難、②学習内容を児童にわかりやすく教えることの困難、③児童の学習時間が予測できないことの困難、④大勢に技能を教えることの困難、⑤具体的な指導方法がわからないことの困難」の5つに分類した。また、「調理実習について」の困難を「①調理実習の活動時間を予測することの困難、②一人ひとりの児童の実態を把握することの困難、③調理実習にかかわる知識の不足に関する困難」に分類した。さらに、困難を克服する課題として、西村・伊藤<sup>6)</sup>は、「家庭科に関して相談できる支援体制の構築、子どもの生活実態などを把握しやすいシステムの構築、研修参加を促す体制づくり」の3点を提起している。

次に、中学校教員を対象にした研究として、河村・中山<sup>7)</sup>は、若手家庭科教員への授業観察から家庭科教師は教科を指導するにあたり様々な葛藤があり、「この葛藤は家庭科教師がひとりで乗り越えなければならぬ、という孤独に立ち向かう必然を伴った厳しいものである。ただし、この理想と現実のギャップを自覚

\*1 東京学芸大学大学院 教育学研究科

\*2 東京学芸大学 生活科学講座 家庭科教育学分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

し、自身の実践を基盤としてこれを埋めていこうとする試行錯誤が、家庭科教師としての成長の契機であるとし、教師の成長プロセスを明らかにしている。さらに、河村・中山<sup>8)</sup>は、「家庭科固有の教師経験に関する成長のプロセスを明らかにしてはじめて、その内容を理解することが可能となり、現職の家庭科教師への支援方法を提案することができる」と述べており、支援方法を提案するにあたり家庭科固有の教師経験のプロセスを明らかにすることの重要性を述べている。

このように、小学校、中学校教員を対象とした指導経験が浅い教員の指導不安や困難などの悩みとその支援の研究はいままでなされてきた。しかし、高等学校教員を対象とした指導不安や困難などの悩みとその支援に関する研究は管見の限りなかった。したがって、本研究を行うことにした。

## 2. 研究の目的

本研究では、採用1年目の公立高等学校家庭科教員（以下、初任者）の教科指導における不安傾向及び属性や勤務状況と教科指導上の不安感との関連を明らかにすることを目的とする。

なお、本研究における初任者とは、各都道府県に新規採用された1年目の教員（産休代替教員経験者、非常勤講師経験者を含む）とする。また、教科指導上の不安感とは、家庭科教員として自信が持てず、Ashton<sup>9)</sup>が定義した「子どもの学習に望ましい変化を与える能力に関する信念」である教師効力感が低い状態とする。

## 3. 研究方法

### 3. 1 調査方法

関東3都県の平成29年度採用公立高等学校家庭科初任者27名を対象に、各都県の高等学校家庭科初任者研修会及び郵送にて質問紙調査を2017年8月～9月及び2018年1月～2月の2回実施した。なお、有効回答率は、調査1回目100%、調査2回目88.4%であった。

### 3. 2 変数

分析に用いる変数は、年代、講師経験の有無、出身大学の学部・専攻、教えている科目、家庭科教員の人数のほか、学校業務全体の不安感、教科指導の際に抱く不安感である。それぞれの変数について以下に説明する。

#### 3. 2. 1 属性・勤務状況

年代 (n=27) は、20代前半13名、20代後半8名、

30代前半3名、40代前半2名、50代前半1名であった。また、講師経験 (n=27) は、「あり」が15名、「なし」が12名であった。出身学部・専攻 (n=27) は、教育学部5名、家政学部9名、栄養学部4名、その他の学部4名、大学院4名、無回答1名であった。また、教えている科目 (n=23) は、学習指導要領における各学科に共通する教科「家庭」のみ教えている初任者が6名、主として専門学科において開設される教科「家庭」も教えている初任者が17名であった。勤務校の家庭科教員の人数 (回答者、非常勤講師等も含む) は、図1に示すように1名～12名であった。

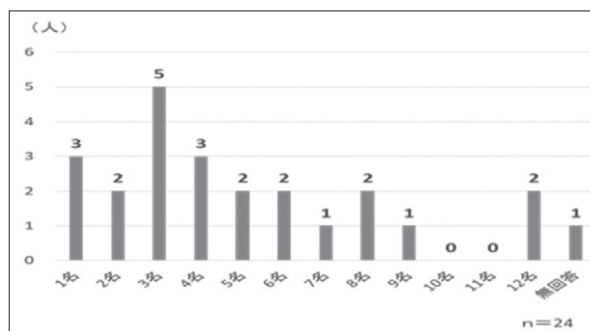


図1 家庭科教員の人数

#### 3. 2. 2 学校業務全体の不安感

学校業務全体の不安感については、文部科学省<sup>10)</sup>の教員勤務実態調査における業務の分類や大塚<sup>11)</sup>の新任教員が会う困難と職場適応のプロセスの研究を参考に質問項目を作成した。「学校の方針に従うこと」「保護者対応」「生徒指導・生徒理解」「進路指導」「教科指導」等の20項目である (図2参照)。回答は、不安を感じている項目について、複数回答で回答を求めた。また、回答があった項目を1点、回答がなかった項目を0点とし、分析に用いた。

#### 3. 2. 3 教科指導上の不安感

教科指導上の不安感については、香曾我ら<sup>12)</sup>の家庭科指導不安尺度や山下ら<sup>13)</sup>の担任教師が家庭科を教える困難に関する研究、山本・加藤<sup>14)</sup>の小・中学校家庭科の調理実習における安全教育の実態を調査した研究、東京都教職員研修センターが作成した「授業力」自己診断シート<sup>15)</sup>及び『(高校用)学習指導に関する自己診断』<sup>16)</sup>を参照し、初任者が抱きやすい不安要因や初任者の段階で身に付けるべきとされている基本的事項を書き出し、質問項目を作成した。「衛生面の管理をすること」「教室や道具の管理をすること (片付けや整理整頓など)」「子どもの興味関心を引くような掲示をすること」「実習道具 (ミシンなど) の修理

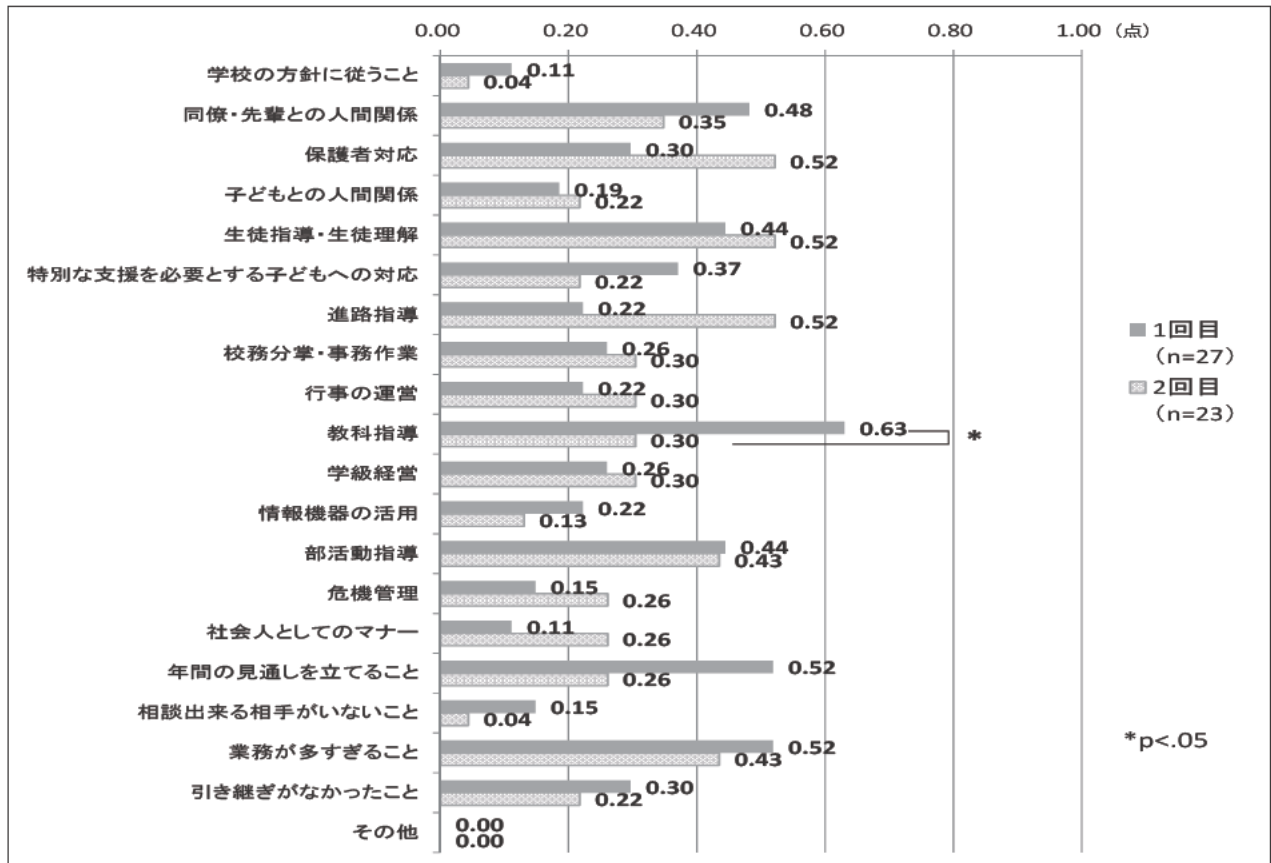


図2 調査時期による学校業務全体の不安感の相違

をすること」等の39項目からなる（表1，2，3参照）。各項目において「不安がある」から「全く不安がない」の4件法にて回答を求めた。また、「不安がある」を4点、「全く不安がない」を1点とし、分析に用いた。

### 3. 3 分析方法及び統計処理

統計処理には、(IBM) SPSS Statistics 24を用いた。各群の平均値の比較においては、*t*検定または分散分析を行った。分散分析の多重比較には、TukeyのHSD法を用いた。因子分析は、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。有意水準は、 $p < .05$ 、 $p < .01$ 、及び $p < .001$ とした。

## 4. 結果

### 4. 1 調査時期による学校業務全体の不安感の相違

学校業務全体の不安感の回答において、調査1回目と2回目の得点に差はみられるかについて対応のない*t*検定を行った。その結果、学校業務全体の不安感20項目のうち「教科指導」の項目のみ有意差が認められ、調査2回目（平均0.30点）の方が調査1回目（平均0.63点）より「教科指導」の得点が低かった（ $t(48)=2.38, p < .05$ ）（図2）。

### 4. 2 教科指導上の不安感の尺度作成

教科指導上の不安感について、項目作成の際に参照した文献等を基準に、「家庭科の授業力」17項目、「基礎的な授業力」10項目、「その他」12項目の3群に分類し、それぞれ主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。以下、結果を述べる。

まず、「家庭科の授業力」17項目のうち、因子負荷量が.35未満であった「年間指導計画通りに授業を実施すること」の項目を分析から除外し、再度16項目で因子分析を行った。最終的な因子パターンは、2因子構造となった（表1）。第1因子は、11項目で構成されており、「座学において、子どもの能力に応じた授業の時間配分を把握すること」「家庭科で学んだことを家庭生活に生かすような手立てを、子どもに指導すること」「アレルギーが発症した場合の対応をすること」「家庭との連携を図った授業をおこなうこと」など、生徒個人への対応や各分野の指導における内容の項目であったため、「個別対応不安」因子と命名した。第2因子は、5項目で構成されており、「被服実習において実演して指導すること」「調理実習において実演して指導すること」「教材研究の時間を確保すること」など、模範を示すための準備など授業をおこなうための準備の内容の項目であったため、「授業準備不安」因子と命名した。



表1 家庭科の授業力 (調査1回目) の因子分析結果

| 項目内容   | I    | II   | 因子名    |
|--|------|------|--------|
| 座学において、子どもの能力に応じた授業の時間配分を把握すること                | .99  | -.24 |        |
| 家庭科で学んだことを家庭生活に生かすような手立てを、子どもに指導すること           | .88  | -.19 |        |
| アレルギーが発症した場合の対応をすること                           | .77  | .15  |        |
| 家庭との連携を図った授業をおこなうこと                            | .74  | -.02 |        |
| すべての子どもに技能を習得させること                             | .72  | .06  |        |
| 科学的、本質的な理解に基づいた授業をおこなうこと                       | .72  | .02  | 個別対応不安 |
| 衛生面の管理をすること                                    | .71  | -.22 |        |
| 十分な安全指導をおこなうこと                                 | .71  | .12  |        |
| 実習場面において子どもの能力に応じた授業の時間配分を把握すること               | .69  | .12  |        |
| 子どもの家庭環境を把握し、その特徴を生かしたり、配慮したりした授業内容を計画し、指導すること | .67  | .01  |        |
| アレルギーの子どもに配慮した授業を考えること                         | .50  | .41  |        |
| 被服実習において実演して指導すること                             | -.29 | .86  |        |
| 調理実習において実演して指導すること                             | .18  | .67  |        |
| 教材研究の時間を確保すること                                 | -.21 | .59  | 授業準備不安 |
| 危険を予想して授業を考え、授業をおこなうこと                         | .33  | .58  |        |
| 授業で使用する裁縫道具や調理器具、布、食材、調味料などの準備をすること            | .21  | .54  |        |
| 因子間相関 .68                                      |      |      |        |

次に、「基礎的な授業力」10項目において、因子分析を行った結果、2因子構造となった(表2)。第1因子は、5項目で構成されており、「めあてを達成させる授業をおこなうこと」「実習指導において客観的で適切な評価をすること」「子どもの興味関心を引き出すことのできる授業をおこなうこと」など、授業をおこなうための基礎的・基本的な内容の項目であったため、「質保証不安」因子と命名した。また、第2因子も5項目で構成されており、「子どもにルールを徹底させること」「的確な指示を出して集団を動かすこと」「子どもに号令やあいさつをきちんと指導すること」など、授業規律に関する項目であったため、「授業規律不安」因子と命名した。

表2 基礎的な授業力 (調査1回目) の因子分析結果

| 項目内容                            | I    | II   | 因子名    |
|---------------------------------|------|------|--------|
| めあてを達成させる授業をおこなうこと              | .94  | -.20 |        |
| 実習指導において客観的で適切な評価をすること          | .89  | .02  |        |
| 子どもの興味関心を引き出すことのできる授業をおこなうこと    | .86  | -.01 | 質保証不安  |
| 常に授業内容・方法を工夫し、授業の質を高めること        | .77  | -.04 |        |
| 座学において、客観的で適切な評価をすること           | .64  | .17  |        |
| 子どもにルールを徹底させること                 | -.08 | .92  |        |
| 的確な指示を出して集団を動かすこと               | .00  | .88  |        |
| 子どもに号令やあいさつをきちんと指導すること          | -.21 | .77  | 授業規律不安 |
| メリハリのある授業をおこなうこと(聞く時間、活動する時間など) | .28  | .70  |        |
| 忘れ物をした子どもに対して指導をおこなうこと          | .32  | .57  |        |
| 因子間相関 .61                       |      |      |        |

続いて、「その他」12項目において、因子負荷量が.35未満であった「体験活動のフィールドを準備すること」の項目を分析から除外し、再度11項目で因子分析を行った。最終的な因子パターンは、2因子構造となった(表3)。第1因子は、5項目で構成されており、「既習事項や習得状況を理解し授業に臨むこと」「家庭科を学ぶ意義を伝えること」「授業中、子どもの反応に応じた授業展開をすること」など、生徒の状況を理解する内容の項目であったため「生徒理解不安」因子と命名した。第2因子は、6項目で構成されており、「新しい指導方法(アクティブラーニング等)を取り入れること」「体験活動の際、地域との連携を図ること」など、指導方法に関する内容の項目であったため、「指導方法不安」因子と命名した。

表3 その他 (調査1回目) の因子分析結果

| 項目内容                      | I    | II   | 因子名    |
|---------------------------|------|------|--------|
| 既習事項や習得状況を理解し授業に臨むこと      | .91  | -.12 |        |
| 家庭科を学ぶ意義を伝えること            | .86  | -.05 |        |
| 授業中、子どもの反応に応じた授業展開をすること   | .86  | .01  | 生徒理解不安 |
| 実習指導において片づけの時間を確保すること     | .58  | .17  |        |
| 子どもの興味関心を引くような掲示をすること     | .37  | .29  |        |
| 新しい指導方法を取り入れること           | -.18 | .86  |        |
| 体験活動の際、地域との連携を図ること        | .09  | .70  |        |
| 教科横断的な学習を取り入れた授業をおこなうこと   | -.03 | .70  | 指導方法不安 |
| ICTを活用した授業をおこなうこと         | .17  | .48  |        |
| 実習道具(ミシンなど)の修理をすること       | .26  | .44  |        |
| 教室や道具の管理をすること(片付けや整理整頓など) | .01  | .38  |        |
| 因子間相関 .51                 |      |      |        |

なお、今回の調査において対象者の対応が取れなかったため、調査1回目の因子分析の結果を2回目にも用いて分析をおこなった。また、 $\alpha$ 係数を算出したところ、「個別対応不安」因子で、1回目 $\alpha = .93$ 、2回目 $\alpha = .86$ 、「授業準備不安」因子で、1回目 $\alpha = .80$ 、2回目 $\alpha = .64$ 、「質保証不安」因子で、1回目 $\alpha = .90$ 、2回目 $\alpha = .85$ 、「授業規律不安」因子で、1回目 $\alpha = .90$ 、2回目 $\alpha = .88$ 、「生徒理解不安」因子で、1回目 $\alpha = .86$ 、2回目 $\alpha = .74$ 、「指導方法不安」因子で、1回目 $\alpha = .77$ 、2回目 $\alpha = .73$ であったため、十分な内的整合性が示されたといえる。

因子ごとに項目の合計得点の平均を求め、各因子の下位尺度得点を算出し、以後の分析に用いる。また、各因子について得点が高いほど、不安感が高いことを示す。

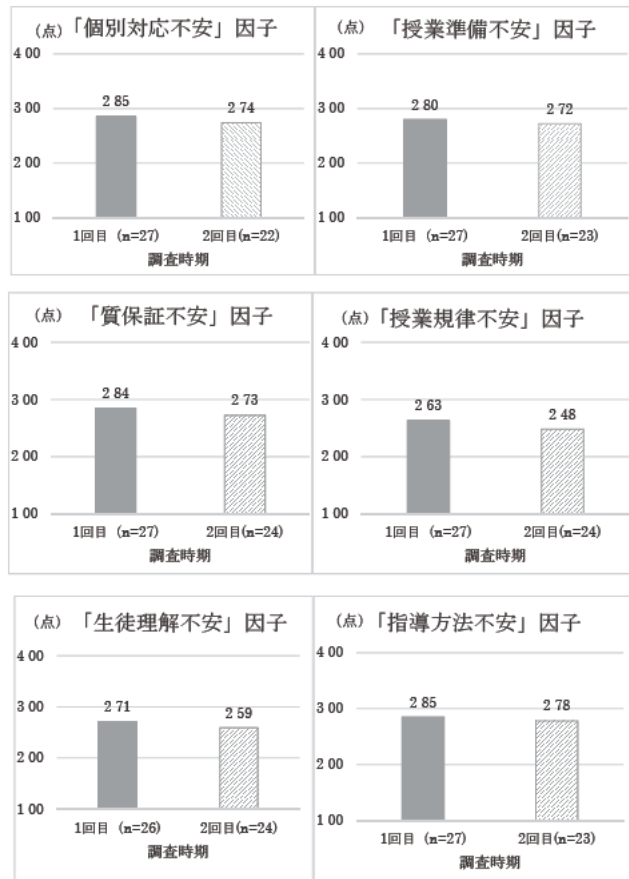


図3 調査時期による教科指導上の不安感の得点差

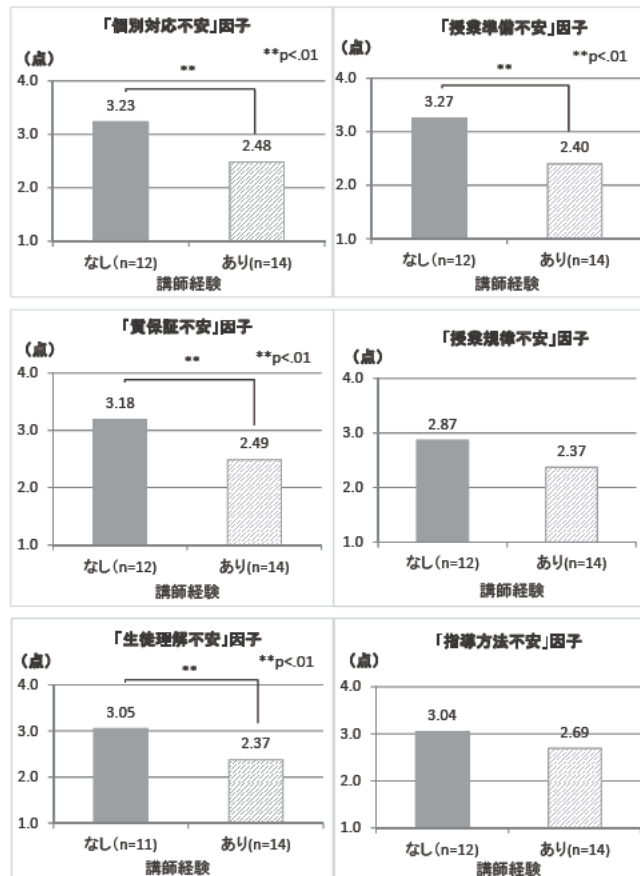


図4 講師経験の有無による教科指導上の不安感の得点差

4. 2. 1 実施時期による教科指導上の不安感の比較

調査時期による教科指導上の不安感得点の差を対応のないt検定を用い比較した。その結果、すべての因子において2回目の方が得点が低くなったが、有意差は認められなかった(図3)。

4. 2. 2 講師経験の有無による教科指導上の不安感の比較

また、講師経験の有無により教科指導上の不安感得点に差がみられるか対応のないt検定を行った。その結果、「個別対応不安」因子 ( $t(24) = 3.85, p < .01$ ), 「授業準備不安」因子 ( $t(24) = 3.97, p < .01$ ), 「質保証不安」因子 ( $t(24) = 3.05, p < .01$ ), 「生徒理解不安」因子 ( $t(23) = 3.39, p < .01$ ) において、講師経験「なし」の方が、有意に得点が高かった(図4)。

4. 2. 3 年代と教科指導上の不安感との関連

調査1回目(n=27)において、年代と教科指導上の不安感得点に関連がみられるか、講師経験の影響をとり除き、偏相関係数を求めた。その結果、「生徒理解不安」得点において、有意に比較的強い負の相関がみられた。 $(r = -.428, p < .05)$ (表4)。

表4 年代と教科指導上の不安感との関連

| 制御変数 | 個別対応 授業準備 質保証 授業規律 生徒理解 指導方法 |    |      |     |      |      |       |      |
|------|------------------------------|----|------|-----|------|------|-------|------|
|      | 年代                           | 不安 | 不安   | 不安  | 不安   | 不安   | 不安    |      |
| 講師経験 | 年代                           | -  | -.26 | .04 | -.37 | -.32 | -.43* | -.11 |

\* $P < .05$

4. 2. 4 家庭科教員の人数と教科指導上の不安感との関連

調査2回目(n=24)において家庭科教員の人数と教科指導上の不安感得点に関連がみられるか、相関係数を求めた結果、ほとんど相関はみられなかった(表5)。

表5 家庭科教員の人数と教科指導上の不安感との関連

| 人数 | 個別対応 授業準備 質保証 授業規律 生徒理解 指導方法 |      |      |     |      |     |     |
|----|------------------------------|------|------|-----|------|-----|-----|
|    | 不安                           | 不安   | 不安   | 不安  | 不安   | 不安  |     |
| 人数 | -                            | -.14 | -.13 | .04 | -.06 | .09 | .18 |

4. 2. 5 実施時期と出身大学による教科指導上の不安感の比較

出身学部・専攻について尋ねた項目を教育系大学(1回目6名, 2回目3名), 家政系大学(1回目13名, 2回目10名), 栄養系大学(1回目4名, 2回目5名), その他の大学(1回目3名, 2回目0名)出身者に分け、調査実施時期と出身大学により教科指導上の不安

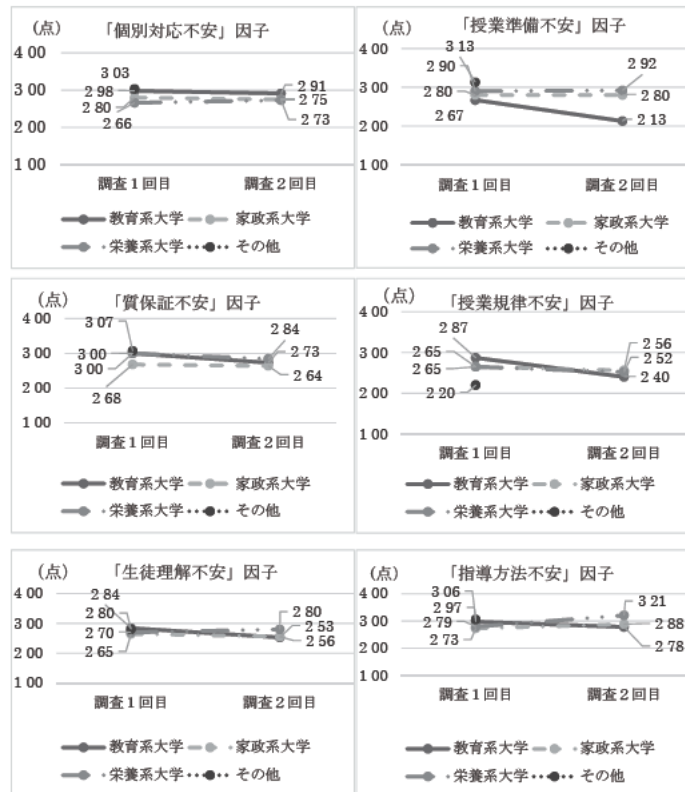


図5 実施時期と出身大学による教科指導上の不安感の得点差

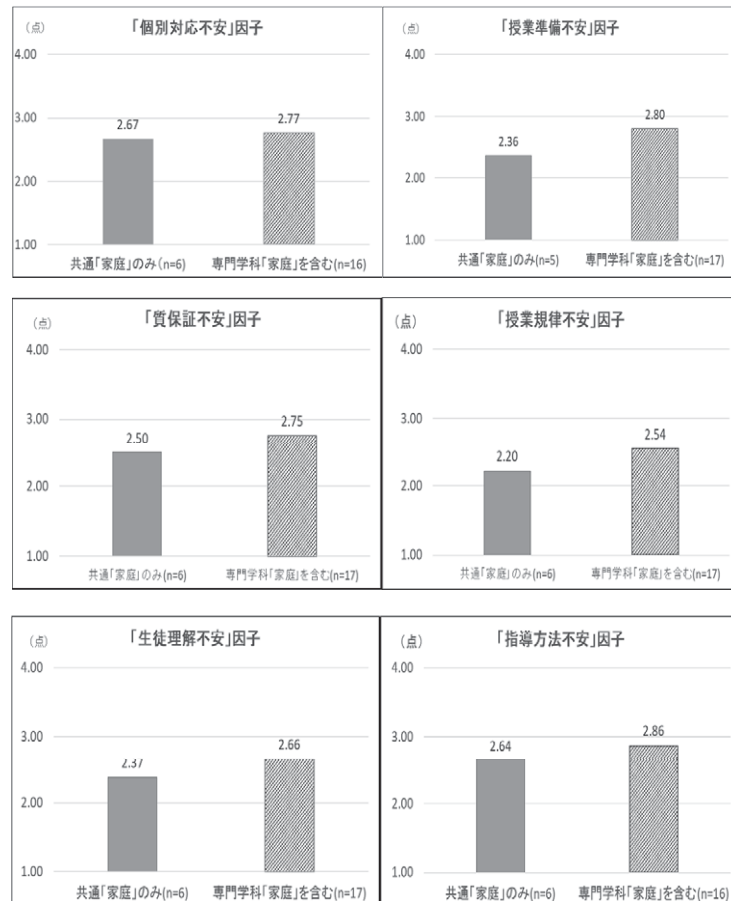


図6 指導科目による教科指導上の不安感の得点差

感得点に差はみられるか、2要因の分散分析を行った。その結果、すべての因子において、交互作用に有意差は認められなかった(図5)。

#### 4. 2. 6 指導科目による教科指導上の不安感の比較

調査2回目において尋ねた指導科目について、教科指導上の不安感得点の差をt検定で比較した。その結果、すべての項目において、専門学科「家庭」も教えている初任者の方が、得点が高かったが、有意差はみられなかった(図6)。

### 5. 考察

初任者は、調査1回目と2回目の約半年間において、「学校業務全体」の項目のうち、「教科指導」の項目のみ得点が有意に減少した。また、講師経験1年以上の指導経験は、教科指導において不安感を軽減させる要因になりうることを示唆された。特に「個別対応不安」因子のなかの項目である「アレルギー」に関する内容や「危険を予想して授業」を行うことは、「生徒の安全にかかわる重要事項」であり、初任者が事前に知識や経験を積むことで、不安感が軽減する可能性

が推察された。

また、初任者の属性や勤務状況と教科指導上の不安感得点との関連において、年代と「生徒理解不安」因子との間に相関がみられたが、家庭科教員の人数による相関はみられなかった。

### 6. 今後の課題

今回、作成した教科指導上の不安感尺度の項目は、基礎的な授業力と家庭科の授業力とその他の項目で構成されている。これらの項目に加え、本研究の調査対象者には、自由記述回答にて各分野を指導する際の具体的な不安要因についても調査している。今後、各分野の指導不安を抱く要因についての結果も含め、考察を深めていく。また、2017年12月～2018年3月に実施した初任者10名へのインタビュー調査の分析もを行い、支援策を検討する。

### 謝辞

本研究にご協力いただきました、指導主事の先生及び初任者の方々に深く感謝いたします。



なお、本研究の一部は、日本家庭科教育学会第61回大会（茨城）において口頭発表を行った。

### 引用文献

- 1) 文部科学省:今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申), 2. 教員をめぐる現状. 中央教育審議会答申, 2006  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm) (2018年9月アクセス)
- 2) 文部科学省初等中等教育企画課:教職員のメンタルヘルス対策検討会の最終まとめについて, 2013  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/old\\_chukyo/old\\_shokuin\\_index/toushin/131585.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_shokuin_index/toushin/131585.htm) (2018年9月アクセス)
- 3) 日本学術会議, 健康・生活科学委員会家政学分会:生きる力の更なる充実を目指した家庭科教育への提案, 1-9, 2017
- 4) 高木幸子:教職経験により小学校教員が感じる不安や課題—家庭科教員養成課程を卒業した教員への調査から—, 新潟大学教育学部研究紀要人文・社会科学編, 7 (2), 325-333, 2015
- 5) 山下綾子・河村美穂:担任教師が家庭科を教える困難とは何か—家庭科を初めて教える若手教師の授業実践から—, 埼玉大学・教育学部附属教育実践総合センター紀要, Vol.15, 33-34, 2016
- 6) 西村由佳・伊藤圭子:小学校における初任家庭科教員が直面する困難克服プロセスの検討, 学習システム促進研究センター『学習システム研究』第5号, 1-14, 2017
- 7) 河村美穂・中山朱真実:家庭科教師の成長—中学校の授業観察からみる‘成長の契機’—, 埼玉大学紀要, 教育学部(教育科学), 54 (2): 20, 2005
- 8) 前掲7), 20-21
- 9) Ashton, P.T: Motivation and the teacher's sense of efficacy, In Ames, C. and Ames, R.(Eds.) Research on Motivation in education: Vol. 2, 141-174. Orlando, FL: Academic Press., 1985
- 10) 文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課初等中等教育分科会チーム学校作業部会:学校や教職員の現状について, 参考資料1. 3, 2015
- 11) 大塚弥生:新任教員が会おう困難と職場適応のプロセス—ナラティブから見るレジリエンス—, 南山大学紀要『アカデミア』人文・自然, 10号, 151-168, 2015
- 12) 香曾我部琢・越後百々奈・福田花野・嶋貫綾香・下地ひかる:小学校の家庭科学習において教育学部生が持つ授業指導不安:家庭科指導不安尺度の作成と教師効力感, 実習経験, 教師希望度への影響に着目して, 宮城教育大学情報処理センター研究紀要, COMUE (23), 41-48, 2016
- 13) 前掲5), 33-35
- 14) 山本美奈・加藤圭子:小・中学校家庭科の調理実習における安全教育の実態, 日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集, 59 (0), 60, 2016
- 15) 東京都教職員研修センター:授業力診断シート活用集, 平成29年度「授業力」自己診断シート
- 16) 東京都教職員研修センター:平成29年度学習支援ファイル(1年次・都立中高)『(高校用)学習指導に関する自己診断シート



# 高等学校家庭科初任者が抱える教科指導上の不安感

—— 関東 3 都県の初任者への質問紙調査から ——

## Survey on anxiety about subject guidance conducted by beginning teachers of home economics at high school:

by questionnaire surveys for teachers in 3 prefectures of Kanto region

高橋 菜月\*<sup>1</sup>・池崎 喜美恵\*<sup>2</sup>

Natsuki TAKAHASHI and Kimie IKEZAKI

家庭科教育学分野

### Abstract

The purpose of this study is to clarify the tendency of the anxieties about the subject guidance held by beginning teachers of home economics at public high school holds and attributes and the duty situations and the connection with anxieties in the subject guidance. The survey was administered to 27 high school home economics teachers of three prefectures of Kanto. the twice of from January, 2018 to February carried out inventory survey for from August, 2017 to September.

As a result, between the first and the second investigation, the anxiety about “the subject guidance” in the whole school was significantly decreased. In addition, in the association between attribute and duty situation and anxieties in the subject guidance, there was the factor which the correlation that anxieties in the subject guidance were low was seen in so that the generation was high. But, between the number of home economics teachers and native place University and each factor, the correlation was not seen.

**Keywords:** high school, home economics, beginning teachers, subject guidance, anxiety

*Department of Home Economics, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

**要旨:** 本研究の目的は、採用1年目の高等学校家庭科教員が教科指導における不安傾向及び属性や勤務状況と教科指導上の不安感との関連を明らかにすることである。関東3都県の公立高等学校家庭科初任者27名を対象に、質問紙調査を2017年8月～9月、2018年1月～2月の2回実施した。

その結果、調査1回目と2回目では、学校業務全体の不安感における「教科指導」は有意に減少した。また、属性や勤務状況と教科指導上の不安感との関連において、年代が高いほど教科指導上の不安感が低い相関がみられた因子があった。しかし、家庭科教員の人数や、出身大学と各因子との間には、相関はみられなかった。

**キーワード:** 高等学校, 家庭科, 初任者, 教科指導, 不安感

---

\*1 Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

\*2 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)